

文藝春秋の木俣正剛常務取締役による 「社員の皆さんへ」というメール

皆さんが日々の業務に勤しんでおられるなか、私たち経営陣の問題でお騒がせ、ご心配をおかけしていますことを、まずもってお詫びいたします。

まことに申し訳ございません。

このような事態を招いた責任は私にもあることを痛感しております。そこでお詫びと、わが社でいま何がおきているのかをできる限り正確にお伝えしたいと考えて、この文書の作成を思い立ちました。

周知のとおり、これまで月刊文藝春秋、週刊文春は社会の木鐸として報道を重ねて参りました。とくに週刊は「ゲス不倫」「陰湿パワハラ」「お友達人事」などを厳しく報道してきた立場です。

しかしながら、わが社の松井清人社長(週刊の担当役員でもあります)にも、複数のメディアから同様の問題が指摘されました。「不倫、婚外子」「労災申請をした社員に対し、申請自体に否定的な言動をしたパワハラ」「会社のガバナンスを考慮せず近視眼的に身近な役員ばかり登用する」といったものです。しかも、松井社長は当初、7月からの新体制で代表取締役会長への就任を表明しました。それに関しては、西川副社長と私など役員、執行役員数名で説得して断念していただきました。こうしたことは一部で報道されました。皆さんには真実として伝わっていないかもしれませんが、この経緯は事実です。

皆さんはこんな姿を見たことはないかもしれませんが、意に添わない社員を怒鳴りあげたり、自らの好みに合わない記事を載せた雑誌の編集長を恫喝まがいに攻め上げる。それが自由にものが言えるはずだった文春の社風をいちじるしく侵害しているのです。

かつて阿川弘之さんは本誌への寄稿で、「伝統の社風」と題して文春社員心得帖を作成されました。六項目の第一番目として「どんな上役に対しても自由にものが言へて自己主張を容易に曲げないこと」と記されました。こうした文藝春秋の良識、よき社風、伝統を失うことは作家をはじめする寄稿家の方々、長く文藝春秋を支えた広告スポンサーへの信頼を裏切ることにもつながります。同時に、文春ジャーナリズムの立ち位置、すなわち取材や批判の正当性を問われかねない事態なのです。

こうした状況に対して、良識ある部署長有志が立ち上がりました。ご承知のとおり、松井社長が意図した新経営陣案の見直し、取締役・執行役員の協議による新経営陣案を求めたものです。しかし残念ながら、松井社長や新経営陣に指名された役員は、こうした要望に「重く受け止める」と発言しながら、事実上のゼロ回答となりました。それどころか、この部署長たちに対して報復的な人事を行おうとしている疑いさえあるようです。

皆さんもご存じのとおり、要望書を出した部署長たちは、わが社の中核を担う人材ばかりです。そうした人たちの思いを理解せず、人事などを行うことは、文藝春秋は会社として成り立たないのは自明です。これでは経営のガバナンスが機能しません。本来なら、

会社のガバナンスをもっと客観的かつ公正に行うための経営の強化をはかるべきなのに、このままでは会社の将来は見えてこないのではないのでしょうか。

そんな情報を入手した朝日新聞出版の「アエラ」が最初に取材に来ました。ほぼ同時に朝日新聞からも取材が入りました。私の自宅には三度にわたって、厳しい事実を突きつける取材がきました。他の複数の役員や社長本人にも。彼らは驚くほど詳細な情報をもっており、そこで事実確認の意味でも、真っ正面から取材を受ける覚悟を決めました。取材に応じなければ、観測記事や歪曲された記事が書かれてしまう恐れもありました。私が懸念したのは、労働組合、部署長会のやむにやまれぬ行為が「内紛」や「反乱」などとして書かれることでした。

実際のところ、そのような記事も既に書かれております。しかし、私はこの動きが単なる内紛や反乱と異なり、会社の将来を憂える者たちの真摯な闘いであると理解しています。そのため、流れを変えるには、事実経過を説明し真実を語るしかないと判断しました。各方面、社内外からのお叱り、ご批判を受けることを承知のうえ、朝日新聞の取材を受けました。それが27日(日曜日)朝刊の記事です。

しかしながら、私の未整理な心境や言葉足らずのせいでわかりにくい記事になってしまったことも事実です。そこでこの文書を書くことにいたしました。

これまでの経緯のなかで松井社長や新経営陣案に指名された取締役の対応が理に適っているのか、あるいは組合や部署長たちの要望が正しいのか。それは、フォア・ザ・カンパニーに照らしてみれば、その是非は自ずと明らかではないかと思えます。

いうまでもなく出版不況はさらにこれから厳しさを増すでしょう。そのなかで生き残るのに問われるのは、なぜ文藝春秋という会社がこの国に必要なのか、文藝春秋が日本人のために何ができるのかを常に自戒することだと思えます。私は文藝春秋という会社は日本にとって大切な会社だとずっと思ってきました。ただ、数字的に生き延びればいい、という会社ではあってはならないと思えますし、これからもそうであってほしい。

どうか社員の皆さんにおかれましては、お一人おひとりが何が文藝春秋にとって重要なのかをぜひ考えていただきたいと思えます。

本来なら、私も責任上、会社のために身を粉にして働くべきなのでしょうが、個人的利益のためと邪推されたくないと思えます。また、松井社長やその考えに反対しなかった経営陣を説得しきれなかった責任は経営陣の一員として負うべきであると思えますので、今期末で社を去ることにいたしました。

みなさんには申し訳なく思います。文春は自由闊達、全員野球の本当に楽しい会社でした。みなさんの手で一刻も早く、文春に笑顔が戻ることを期待しています。

なお、このメールを直接みて傷つく人がいる可能性も考え、社員全員メールという形ではお送りしていません。部署ごとに私が自分でアドレスを登録してお送りしました。

bcc メールとしたのも、誰に届いたのか、届かなかったのかお互いが疑心暗鬼にならないようにで、基本的に社内配属表にしたがって役員以外の全員にお送りしています。